



友がいてこそ化学は楽し

ふく やま とおる
福山 透

東京大学大学院薬学系研究科

そして再びハーバードへ

1974年の夏、岸さんが37歳の若さでハーバード大学化学科の正教授に着任したのに伴い、私も大学院に編入されて再渡米した。

岸研究室は、19世紀末に建てられた Mallinckrodt Building 3階の改修されたところに入った。床には継ぎ目がなく、水をこぼしても階下に漏れる心配はないし、新品の実験台の表面は薬品に強いセラミックス製、個人用のドラフトもあり、何から何まで名大の実験室とは大違いだった。あれから30年余り経った今でも、日本の大多数の大学がそのレベルに遠く及ばないのが悲しい現実である。

Mallinckrodt から徒歩2分の Perkins Hall という寄宿舍の4階で、Mark Burns というカリフォルニアの La Jolla (ラホヤ) から来た物理化学専攻の院生と2室を共有することになった。ときどき Mark の留守中に電話がかかってきて、名前を聞くとロンとかドンとかいうので、彼には中国人の友だちが多いんだなあと思っていたが、のちに Ronald や Donald の略称だということが判明して爆笑。隣室のニューヨーク出身の院生が機関銃のように英語をまくしたてるのは対照的に、Mark は南カリフォルニア育ちのおっとりした性格で、我慢強くゆっくり話してくれたので助かった。

刺激的な講義の数かず

ハーバードの有機化学といえば、なんといっても



Mallinckrodt Building. 岸研は遠方の右翼3階にあった。



なつかしの Perkins Hall.

Woodward-Hoffmann 則の Woodward 先生が大スターである。しかし、有機化学の講義で、Bartlett 先生や Doering 先生が Woodward-Hoffmann 則のウの字もいわなかったのが印象に残っている。ここは W-H 則の総本山と思っていたのに、協奏反応の解釈が W-H 則を使わずともできるというような意地を感じたのは私だけだろうか。その後、Yale 大学の Jerome Berson 教授の講演を聞いたときも、先生は Cope 転位はジラジカル機構だと確信している様子だった。

Woodward 先生は別格の University Professor だったので教壇に立つことはなく、本家の講義を聞く機会はなかったが、科学といっても、事象の解釈は一通りではないということを実感した貴重な体験である。

希有の秀才に「負けてたまるか」!

一方、一番面白かったのは Corey 先生の有機合成講義で、先生が全合成されたさまざまな天然物の逆合成解析から実際の合成までを次から次へ颯爽と話されていたのが鮮明に思いだされる。この講義は世界中から集まったポストドクも聴講していて、一種独特の雰囲気があった。なかでも、Rick Danheiser (Corey 研, 現 MIT) や Bill Roush (Woodward 研, 現ミシガン大学) といった、私より歳下の院生が鋭い質問をときどき Corey 先生に浴びせていたのには驚いた。「なんでそんなことまで知っているんだらう?!」と、今まで見たこともない秀才を前に、わが身の未熟さを自覚。ハーバード

在学中に得た体験のうち、とくにインパクトが大きかったのは、上には上があることを実際に知ったことだと思う。私自身は結構穏和な性格のもち主であると思っている（異論はあるかもしれないが）。しかし、実は相当な負けず嫌いだ（はしたないから外にだしてないだけ）。希有の秀才たちを見て、「負けてたまるか」と思ったことが私のやる気に拍車をかけたのは間違いない。

昨年、アメリカ化学会から有機合成化学分野の賞をいただいたが、Bill Roush も天然物化学分野の賞を受賞した。「Bill, 君のおかげでハーバード時代は頑張ることができたよ」と彼にいったら、彼も「透、僕こそなんとか君に追いついて、よい成果をあげようと頑張ったんだ」と、お互いにライバルだったことを白状し合った。

岸研同室の日本人仲間たち

ここで、ハーバード在学中に知り合い、今でも会えば思い出話に花を咲かせる方がたについて述べてみる。1974年、岸研の4人部屋で最初に知り合ったのが矢澤久豊さん（前藤沢薬品）だった。東北大亀谷研の出身だが、名大平田研で博士号を取られた縁で、研究室立ち上げに参画すべく派遣されてきた。私より10歳年上だったが無茶苦茶に働く人で、ほぼ毎日、夕食を共にしていた。週日の夕食は Harkness Commons という院生用食堂、土曜は Yan Yee というハーバードスクエア界隈の中華料理屋、日曜午後の実験後もどこかで、といった具合だ。ちなみに、彼は軍歌好きで夜遅く実験室でよく聞いていたが、岸さんは内心ハラハラしていた。矢澤さんが1年で帰国し、入れ替わりで新婚ホヤホヤの檜山爲次郎さん（現京大工学部教授）がやって来た。何事につけ



受賞式で Bill Roush と。

一家言を関西弁で開陳され、「フムフム」と私は聞き役。Chemical & Engineering News を読んでいて、いきなり興味のあるページだけをビリビリッと破り取り、残りをポンとゴミ箱に捨てた思いっきりのよさが目に焼き付いている。奥さんと3人で、隣町までアイスクリームを食べに行ったのが懐か



ちょっとお茶目な秀才の Rick Danheiser. 研究室に「風林火山」の旗頭。

しい。その檜山さんも1年後に帰国し、次に来たのが中田忠さん（現東京理大理学部教授）で、不言実行かつ無類のしぶとさが最大の特徴。私と違って口が堅いが、探りを入れると、実は私と同類で下世話な話好きであることが判明。中田さんとは2年近く重なっていたが、最初の1年間、私がNMRの取り方を教えなかったと今でも根にもっている(?)らしい。当時化学科には80 MHzのNMRが2台あっただけで、前日から皆が測定時間を奪い合っていたので教える時間などなかったのが実情だ。教える時間があるくらいなら代わりに取ってあげると、NMR室へ速足で歩いていく私のあとを走って付いていった、という中田さんの思い出話に、「そんなこともあったよね」とニヤリ。

ハーバードでの友は一生の友

他研究室では、Corey 研よりも Woodward 研の人と話すことが多かった。これは Corey 先生が午前と午後各部屋をキッチリ巡回することと、Woodward 先生が院生の部屋に顔をださないことと無関係ではない。例外は Corey 研の柴崎正勝さん（現東大薬学部教授）で、Converse Building 地階の唯一の夜間出口付近の実験室で深夜0時を過ぎても精神的に実験されていた。私が帰宅するときに柴崎さんの部屋に立ち寄って将来の話などをしていたが、まさか同僚になろうとは！ Woodward 研でポスドクをしていた竜田邦明さん（現早稲田大理工学部教授）の実験室にもときどきフラットとお邪魔して駄弁っていたが、その腐れ縁は今でも続いている。化学といっても人間がするものであり、友だちがいるからこそ化学を論じるのも楽しくなるのだ。ここには記せなかったが、ハーバードで知り合った多くの友人たちとの交流によって、ともすれば無味乾燥になりがちな研究が色彩豊かで楽しいものになっていったことも特記しておきたい。